フェリとイタリの神隠し

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェリとイタリの神隠し

【Ｎコード】
Ｎ０７５４Ｚ

【作者名】
Ａｒｔｈｕｒ

【あらすじ】
そこにたどり着いたとき、俺は、何故ここにいるのかも、どうやってここに来たのかも、何も覚えていなかった。幾ら記憶の引き出しを開けても。普通の日常の狭間から入った別世界。そこで、俺はアイツと出会ったんだ・・・！！
ヘタリア二次創作　フェリとイタリの神隠し～小説化してみた～

アイツとの出会い（前書き）

この作品はｓｍ９６０３２６５（フェリとイタリの神隠し）に心打たれ「そうだ。小説書こう。」と思い書いたものです。ところどころ文法変だったり、話が掴みずらかったりしている可能性が大いに考えられますので、あ。無理。という方は読まないことをお勧めします。だいたい許せる。というアマゾン川並みの心の広さの持ち主の方は読んでみるのもよいかもしれません。やさしいアドバイス待ってます。

アイツとの出会い

イタリア君の世界が始まりです。

――ありえない場所があった。ありえないことが起こった。そこは、ふとした日常の片隅に存在する狭間の世界。そこは、この世の者が入ってはいけない世界――

「ここは、一体どこなの・・？」

俺は、広い草原に立っていた。そこには青い空が広がり、ところどころによく分からない形をした石像が無造作に散らばっている。

（俺・・確か、日本の家に遊びに来たら日本とはぐれちゃって、日本の事探してたらトンネル見つけて、ここに・・）

記憶を辿っても、どういう道をたどってきたのか、何故あのトンネルの中に日本がいると思い入ろうと思ったのかが分からない。こんな所に日本がいるはずは無いないのに。幾ら思いだそうと思っても、トンネルに入るところからしか詳しく思い出せなかった。何をしていいか分からない俺は、とりあえず草原を見渡した。

「ん・・？遠くに街・・かな？」

行ってみようか・・。そう思いながら俺は足を進めた。

「ふー。ついたー。あれ？でも誰もいない・・。まだ昼なのに・・。」

（とりあえず、もうちょっとあっちまで行ってみよう・・・。）

しばらく歩いたが全く人の気配がしない。何やらおかしいとは思ったけれど帰る道が分からないのだから前に進むしかないだろう。俺はしばらく歩を進めた。ある程度進んだところに大きな建物があった。

（なんだ・・これ・・。）

煙突から煙が出ていることから中に人がいることは分かった。なにやら上のほうには旗があって「眉」と書かれている。しばらくその建物を見ていたらぼーっとしてしまっていたようで。
―ガタンゴトン・・・―
俺はその音でぼーっとした世界から抜け出した。
「あ・・！電車の音？！」
そう思い建物までの道にかかっている橋の下を覗き込んだ。
「ここで何をしている！！」
突然、後ろから聞きなれた声がした。
（この声は・・・）
そう思い後ろを振り返ると少年が立っていた。何やらこわばった顔をしている。
（あれ・・？ドイツみたいだけど・・ドイツじゃないのかな・・・。前髪垂らしてるし・・。）
「帰れ！ここはお前のいるべき所じゃない！」
少年は言った。だが、いきなり言われても何が何だかさっぱりだ。
「え・・？」
そう言ったのとほぼ同時にさっきまで見ていた建物に明かりが灯された。
「っっ！！もう明かりが・・！俺が時間を稼ぐ！その間に！早く！」
その少年はそう言いながら俺の背中を強く押した。

俺は、何が何だか分からなかった。ただただ、走り続けた。俺が走るのと平行に進むように街灯や店の灯りがついてゆく。それに何だか黒くて半透明のものが街を歩いている。それもたくさん。その物体にぶつかりそうになる。しかし、そんなこと考えている暇はない。しばらく走った。そして、街を抜けた。
（トンネルまで戻らなくちゃ・・！！）
―ジャバジャバ・・！―
「？！」

トンネルまで行こうと街に来る途中に上った階段を降りた。すると体の腰辺りまでが冷たい水に触れた。
（水！？）
俺は水から抜け出そうと降りてきた階段を上り、階段の上に立った。先ほどまで目指していたトンネルには灯りがともり、昼間は草原だったはずのところには水があって川のようになっていた。遊覧船もある様で川にぷかりぷかりと浮かんでいる。
「嘘だ！嘘だ！！嘘だ！！これは全部夢なんだ！」
俺はその場に座り込んだ。
しばらくそうしていると、遊覧船が俺のいる岸に寄ってきて、中からさっき見た半透明の黒いものとは別の、変なものがやって来た。
「うわぁぁぁ！！！」
俺は急いで物陰に隠れた。どうしたらよいのか分からなくて、しばらくそこにうずもれていた。すると・・
―ザッザッ・・！―
何かの足音がして、俺は化け物が来たのではないかと後ろを振り向いた。しかし、予想は外れていて、そこにはさっきの少年が立っていた。
「間に・・合わなかったか・・・・。」
それが、俺と少年の出会いだった――

アイツとの出会い（後書き）

この作品が初投稿です。読みずらかったりよく分からない箇所が山ほどあったと思います。最後まで読んでくださったそこの貴方！本当にありがとうございました！次話も書くつもりです。またまたですが、本当にありがとうございました！！

アイツの名前。（前書き）

トンネルをくぐった。そこには不思議の街が広がっていた。俺はそこでアイツと出会った。昔からよく知ってる、アイツに――――。ヘタリア二次創作　フェリとイタリの神隠し（ニコニコから）を小説化してみた。

アイツの名前。

―麻屋(あさや)店主、アーサーの部屋―

「あーちゃー！！」

麻屋最上階に位置する俺の部屋。その窓から、やけにあわてている妖精さんが入ってきた。

「ん・・？どうした？街の見回りは・・」

やってきた妖精さんは担当制の街の見回り組の一員で、今日はその見回りの担当日だったからここにいるということは何か大変な事があったか、妖精さんがさぼっているかどちらかだ。後者はないと思うが。と、いうことは・・

「！！　何かあったのか！？」

俺はかなり大きな声で妖精さんに聞いた。

「しょれがね・・――――！！」

妖精さんは早口に俺に説明した。

「なんだって！？異世界人がこの世界に入って来たぁぁぁ？？ルートはどうした？！アイツだって今日は見回り番のはずだろ！！」

ルートが来てから今まで、アイツが見回り番の時は全くと言っていいほど悪いことはなかったし、あったとしてもアイツがすぐになんとかしていたようだから、妖精さんがあわてて俺のところに来るなんてことなかった。

（しかも、異世界人が来たときに限って・・！！ルートは何をしてるんだ――――？！）

―――「君はさっきの・・！！ねぇ、ここはどこ！？どうしてここに！？君は一体・・」

俺は少年にたくさん質問をしようとした。しかし、俺の言葉は少年

の言葉に遮られた。
「今話している時間はない！今頃、アーサーが手下を使ってお前を探している！！早く立つんだ！！」
少年は俺の手を掴んだ。俺は少年の手を頼りに立とうとしたが、足に力が入らない。俺が立てなさそうな事を感じ取ると少年は呪文を唱え始めた。
「Ｉｎ　ｌｈｒｅｍ　Ｔｅｓｔｍｅｎｔ　ｉｍ　ｎａｍｅｎ　ｄｅｒ　ｗｉｎｄ　ｕｎｄ　Ｗａｓｓｅｒ．よし、立て！」
少年は俺が答える前に走り出した。俺の足は意識していないのに勝手に動き、尋常ならざるスピードで街の路地裏を通り抜けていく。いつの間にやら大通りの方に出てきていて、その時にはもう歩いていた。そして最初に少年に会った建物へと向かっている。周りには遊覧船から降りてきたと思われる妖怪？たちや建物の中で働いていると思われる人たちがたくさんいた。しかし、俺のことが見えないようでみんな気にせず建物へ入っていったり、自分の仕事を続けている。橋の前に差し掛かる時、少年が息を止めるよう俺に指示をしたので俺は息を止めた。もうすぐ渡りきるというところで・・
「ルートヴィッヒさ～ん！」
前に、何やらこちらに向かってくる女の子がいる。
（かわいいんだけど！！息持たないから！！ちょっとどいてぇぇぇ！！！）
しかし、俺は我慢も限界で息をしてしまった。やばっ！俺はそう思いもう一度息を止め直したが間に合うはずもなく・・・。女の子は俺を見て一瞬時が止まったかのように言葉を失っていた。ほんの少しの間が空き、
「ルートヴィッヒさん・・それ異世界人ですか・・？今、中でえらい騒ぎになっとりましたよ・・！」
女の子は目を見開いて少年に言った。
「っち！！ばれたか！イタリア！こっちだ！！」少年は建物を囲む塀に付いている小さなドアを開け、目にもとまらぬ速さで俺を招き

入れた。
　扉をくぐると庭があってそこにある木の陰に隠れさせられた。
「ここにいれば、しばらくの間見つからない。いいか、騒ぎが収まったら後ろのくぐり戸から出て階段を下れ。しばらく行くとボイラー室がある。そこにいるヤツに働かせてもらえるよう頼むんだ断られても粘り強く頼め！帰りたいとか弱事をはくな！逃げるな！！分かったな！？」
そう言っている間に、建物の中から「ルートヴィッヒ様～」と少年を呼ぶ声が聞こえた。少年はその場を立ち去ろうと建物の方を見た。すると彼についての疑問が・・・。
「ねえ！！俺、君に教えてほしいことが・・！！君はどうして俺の名前を知ってるの！？君は俺について知ってるの！？」
少し安心したのだろうか。さっきまで気づかなかった事が次々と頭に浮かんでくる。
「・・・・・。俺はお前のことを昔から知っているのかもしれない。よく思い出せないのだが・・。あぁ。俺の名はルートヴィッヒ。ルートと呼んでくれて構わない。用はもう済んだか？なら失礼する。」
俺は小さくうなずいた。それを確認すると彼は名前を呼んでいる人たちの所へと立ち去った。
（ルートヴィッヒ・・・。ルート・・かぁ・・・）

アイツの名前。（後書き）

前、同じ内容話（２話）を新たな作品として掲載してしまったので、２話をはじめに見てしまった方がいるかもしれません。本当に申し訳ありませんでした！！一話の方も見てやってくださいね。２話まで読んでくださり、すっごく感謝感謝の気持ちでいっぱいです！次話もよろしくお願いします！

麻屋で職探し！（前書き）

不思議の街にある麻屋。そこで俺はルートと出会った。そして、イタリア、麻屋で職探し運動開始！！！

麻屋で職探し！

俺はルートが建物に入った後しばらく木の影に隠れていた。もう建物の中は落ち着いているようで、これといって大きな声はしない。

「もう・・いいかな？」

俺は人に見つからないよう静かに、ルートが言っていたくぐり戸の方へ向かった。

―ギギギギ・・・―

くぐり戸はかなり古いようで音を立てながら開いた。出たところにはルートが言っていた通り階段があった。想像していたのとはちょっと（かなり・・かな・・？）違っていたが。

（何これ！！階段なのは分かるけど、手すりないし！！落ちたら確実に死ぬよぉぉ！ヴェ～！！だれかぁ！助けてぇぇぇぇ！！！）

しばらく階段の前で白旗を振った。まあ、誰も助けになど来てくれないのだが。俺は勇気を振り絞り、壁にべったりくっつきながら階段をかなりゆっくり下った。３段ほど進んだところで・・・

―ばきっ！―

怪しい音をたてて階段の木が折れた。その瞬間、俺は反射的に階段を悲鳴を上げて走り降りる。あんなに大きな悲鳴を出したのにばれなかったのがすごいくらいだ。

「ヴェ・・ヴェェェェ！！怖かった～」

気を取り直して前へ進・・まなかった。金属製のドアにぶつかった。

（もしかして・・）

「ここって・・さっきルートが言ってたボイラー室！？やった～着いたよ～やればできるじゃん、俺♪」

―ぎぃぃぃ・・―

扉をあけるとそこはまだ部屋ではなくて、短い通路があった。前には人間らしきシルエットが２つ、影で映っている。何やら声も聞こ

えてきた。
「あいやぁぁ！！腕の見せ所ある！！ヨンス！しっかり石炭運ぶよろし！！」
「うぃ～す！　兄貴～！石炭運びの起源は俺なんだぜ☆」
「・・・・・。そうあるか。分かったからさっさと運ぶよろし。変なポーズとっても誰も見てくれないあるよ。」
「冷たいですね～　兄貴～」
何やらすっごく馬鹿らしい？話をしている。何だか入り込む隙がなかったがここで引き下がるわけにもいかないので俺は通路を進み部屋に入り、そこにいる人に声をかけた。
「あ・・あのぉ・・　俺イタリアデス！！パスタとピッツァが大好きなお茶目さんです！ここで働かせて下さい！」
すると、二人同時に振り向いて。
「あいやぁ？何あるか？お前は？いきなり働かせてって・・・。」
「そうなんだぜ！俺たちは二人で楽しくお仕事してるんだぜ！お前の入る隙なんかねぇんだぜ！ね、あーにき！」
「そうじゃねぇある！！いきなり働かせろって言われても・・。ここで働くなら、まずはあへんの許可を取らねぇと・・・。」
しばらくの間沈黙が流れた。しかし、やけに声の大きな青年が奥のドアから入ってくるなり、二人に話しかけるものだから一瞬にしてその場の重い空気が消える。
「王躍（ワンヤオ）～　飯の時間やで～♪　あ、ヨンスもな。」
「ついでみたいに言わないでほしいんだぜ！！」
石炭運びをしていた方の少年は青年が来て楽しそうだったが、もう一人の薬らしきものを作っていた方の人はしばらく考え込むような顔をしていたがすぐに表情を変え、思いついたように言った。
「アントーニョ！コイツをあへんのとこまで連れてくよろし！！」
「「「え？？？」」」

麻屋で職探し！（後書き）

どうだったでしょうか？話をまとめる脳力がないのだと思います。全然話が進みませんね。まだ話がジブリの方と変わりません・・まあ、頑張ってニコニコ動画での感動を皆様にお届けできたらな～と思います。ぐったぐったですが次話の方もよろしくお願いします！読んでくれて本当にありがとうございました！！

麻屋最上階（前書き）

親分たちに会って、俺は、この世界にもいい人はいるのだと知った。親分に案内してもらってたどり着いた麻屋最上階。これから、何が起こるのだろう。俺には、予想すらできなかった――――。

麻屋最上階

「え・・？ちょ・・。王（ワン）、何言っとるん？てか、コイツって・・・？」

アントーニョという青年はすごく「何言ってんだ？」みたいな顔をしている。

「コイツある。」

そう言って王躍（ワンヤオ）という名の薬を作っていた人は俺のことを親指を使って指差した。

「え・・人なんておっ・・！！」

アントーニョは全く俺の存在に気づいていなかったようで、指差された方向にいる俺を見て目を見開き、口をパクパクさせている。

「ちょ・・！この人異世界人なん？！さっきまで上で大騒ぎになっとたんやで！！なんでここにおんねん！！」

驚かないはずがない。正確にいうと人じゃないけど。そんなことを思っていたら王さん、とてつもないことを言い出して。

「我（わたし）の孫ある。」

王さんは平然と言った。

（え・・！！俺いつからこの人の孫になったの！？）

ヨンスも驚いた顔をしているが、王さんに口を押さえられているようでモガムゴムガ！としか言えず、何を言っているか分からない。

（あ・・。もしかして、孫ってことにしてアントーニョさんに、あへん？って人の所まで連れて行ってもらえるようにしてくれてるのかも！！）

こういうときは空気を読んでみます。

「孫ぉぉぉぉぉぉ？？？？？？？王、そんなんいたんか？！なんで俺に教えてくれへんねん！も～、はようロヴィーノに紹介してやりたいわぁ！アイツ、子分欲しがってたんよ～！」

アントーニョさん、めっちゃ興奮してます。子分？何のことですか。

「まったく・・。ロヴィーノに紹介する前にあへんに紹介すること、忘れちゃダメあるよ！！」
王さん、話止めてくれてありがとう・・・。
「わーってるわ！アーサーんとこまで連れてけばええんやろ！！」
アントーニョは少し頬を膨らませながら言った。俺の方に顔を向けると勝手に自己紹介を始める。
「俺、アントーニョって名前なんやけど、みんなには親分って呼ばれてんで！お前も俺のことは親分って呼んでぇな！自分、名前なんていうん？」
「俺、イタリア。パスタとピッツァが大好きなお茶目さんです♪よろしくね～♪」
俺はアントーニョが悪い人ではないと分かり、元気に自己紹介した。
（最初この世界に来た時は、何が何だか分からなくて、やっていけないんじゃないかって心配してたけど、みんないい人そうだし、なんとかやっていけるかも・・！！）
俺は、少しうれしくなった。

「アントーニョ。そいつのことは任せたあるよ！！」
王さんは、グッ！と親指を立てながらウインクをして俺のことを送り出してくれた。

アーサーと言う人の部屋に行く途中、親分は俺にここの事を教えてくれた。
「ええか？ここではな、名前が変わんねん。アーサーがそれぞれに名前つけるんやけど・・何のために付けるんやろな？・・・。まあ、ええか。　でな、本当の名前を忘れると、帰り道が分からなくなるんやって。名前、大事にしいや。親分はもう忘れてしもうたけど。」
その他にも、この世界に入った瞬間、異世界人は前までいた世界の事を忘れてしまうこととか、俺みたいに名前を覚えてるヤツもあんまりいないとか・・・。いろんなことを教えてくれた。そんな事を

話しながら俺たちはアーサーの部屋へと向かっていく。しかし2回目のエレベーターの乗り換えの時、親分から異世界人の匂いがするとかなんとかで親分はバッシュと言う人に捕まってしまったが、親分はうまく俺の事をエレベーターに押し込んでくれたのでなんとかなった。親分は・・まあ、自力でなんとかするだろう・・。

エレベーターが麻屋最上階に着き、エレベーターの扉がゆっくり開く。最上階には他の階とは違う雰囲気が漂っていた。他の階よりうす暗く、静かで、何より怖い。エレベーターから少し歩いた所に大きなドアが現れた。直感で、この先にがアーサーの部屋があるのだと分かる。俺は、そのドアの取っ手に手をかけた――――。

――――「・・・。来たみたいだな。イタリア・ヴェネチアーノ・・・。」

俺の机の上にある水晶玉には、扉の取っ手に手をかけるイタリアの姿が映っている。

（また・・一人、集まったな・・・。）

俺はひとり、水晶玉を見ながら怪しい笑みを浮かべた――――。

麻屋最上階（後書き）

まだジブリとお話が変わりませんね・・・。本当にすみません。できる限り皆さんにニコニコ動画での感動を・・・！！って、前にも言った気がします・・・。もうボケが始まったのでしょうか・・・・。まあ、がんばって次話も投稿したいと思います！

アーサー・カークランド（前書き）

ついに俺は、麻屋最上階のアーサーの部屋にたどり着いた。そこにいたのは、少年でも、老人でもなかった。そこにいたのはただ一人。眉毛の太い青年だった。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

アーサー・カークランド

「ちょっ！！バッシュ！！勘弁してぇな！！あれは、王（ワン）さんの孫や！ならええやないか！！」
アントーニョは、両手を合わせてバッシュに頼み込んでいる。
「アイツに孫などおるわけなかろう！！嘘をついてはいけないのである！！」
バッシュはアントーニョの話に聞く耳持たない。本来ならば無視している所だったが、お客様の迷惑にならないか心配だったので言い争いを止めに二人の所へと歩いた。
「全く！！何をしているのですか？！このお馬鹿さんが！！こんなところで言い争っていてはお客様の迷惑になるでしょう！？そんなことも分からないのですか？！」
私は二人の事を叱りつけた。すると二人は私にまで言いかかってきた。
「なんであるか貴様は！！父役だからと言って威張らないでほしいのである！！それに、貴様の声の方が吾輩たちの声より大きいのである！！！」
「そうやで！ローデリヒ！！それに、これは俺たち二人の問題なんや！手ぇ出さんといて！！」
二人が私にまで乱暴な言葉を向けるものだからカチン！ときてしまいまして。
「なんなのですかその口のきき方は！！本当にあなたたちは！！いつになったら――――・・・！！」
その言い争いはしばらく続いたという・・・。

エレベーターを降りてから少しの所にあるドアの先にもいくつかドアがあった。が、今度のドアは今までのとは桁違いの大きさをしている。このすぐ先にアーサーが待ち構えているのだろうか。
（アーサーってどんな人なんだろう・・。やっぱり・・怖くて、つーんとしてて、人を寄せ付けない感じなのかな・・？もしかして、おじいさん？　あ～あ、親分、アーサーのことはあんまり教えてくれなかったんだもんな～）

―ドッキン・・。ドッキン・・・。
俺の心臓がとても早く動いているのが分かる。これからアーサーに会いに行くのだから無理もないが。
（ここで働かせて下さい・・ここで働かせて下さい・・・）
俺は心の中でアーサーに会った時の為の練習をしていた。俺は少しの間ドアの前で立っていたが、ついに扉を開ける決意をした。
「よし！いっくぞぉ～！！ヴェ～！！！」
俺は、ドアに掛けた手を引いた。
―ガチャン、ギィィ・・・
重々しい音を立て扉が開いた。その先には、さっきまでの様な通路がある光景はなかった。俺の目の前には、暖炉と、事務机に背を向けて座っている一人の青年がいた。青年はこちらに背を向けて座っているので顔をよく見ることができなかったが、彼から発せられている雰囲気などから、彼はまだ若く、年老いた老人ではないという事が分かった。身長はそこそこあるようなので、少年ではない。
「やっと来たみたいだな・・・。イタリア・ヴェネチアーノ。」
青年は回転式の椅子に座っているようで、くるっと回ってから俺の方を見てそう言った。彼の顔をようやく見ることができた。彼は、金色に輝く頭髪、澄んだ緑色の瞳を持っていた。緑の瞳は金色の髪によく映える。そして、青を基調とした服を身にまとい海賊帽のようなものまでかぶっている。指にはたくさんの指輪をし、耳には大

きな円形型の金色イヤリング。彼を説明する言葉は今まで言った他にもたくさんあるが、なにより目立つのは、眉毛である。ありえない太さをしていた。彼を漢字一文字で表すなら、「眉」である。

（あ！！だから建物の旗、眉って書いてあったんだ！！！）
今まで生きてきた中でこれほど納得したことはあっただろうか。しかし、そんなこと考えている場合ではない。今、するべきことは他にある。そういえば・・・

「どうして・・俺の名前知ってるの・・？君がアーサーなんだよね・・・？」
この人には初めて会ったわけだから、俺の名前を知っているはずがない。俺は疑問に思った。
（ルートといい、アーサーといい、どうしてみんな俺の事を知ってるんだ？？）
2、3秒すると、青年はフッと笑ってから俺の質問に答えた。
「俺はお前の予想している通り、麻屋(あさや)店主のアーサー・カークランドだ。なんでお前のこと知ってたかって・・そりゃあ、お前のことを待ってたからに決まってんだろ。あ、俺の為だからな！！勘違いすんなよ！！！」

アーサーさん・・。思ってたのと、なんか・・印象違います。

アーサー・カークランド（後書き）

５話まで読んでくださった方がいるなんて・・！！！感謝感謝です！皆様に楽しんでいただけるお話を目指して頑張ります！！暇な方は評価・感想の方お願いいたします！ここまで読んでくださって本当にありがとうございました！

仕事見つかりました。　ｂｙイタリア（前書き）

――――俺は、俺の望む世界を作るんだ。誰にも、邪魔はさせねぇ・・・。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

仕事見つかりました。　ｂｙイタリア

「ここは神の国。お前には国ではなく、人間として働いてもらうぜ。」
ここには神様がいるようだ。その前に、アーサーは俺のことをなんでも知っているのだろうか・・？俺が国だということまで知っているなんて。

（あれ・・てか俺、働かせて下さいって言ってないのに・・。まあ、いっか♪働かせてもらえるなら特に問題ないし！しばらくの間元の世界には帰れないのかなぁ・・。）
アーサーは机に座ったまま何かを探している。
―ガサゴソガサ・・。
「お！あったあった！」
アーサーはＡ５サイズ位の紙を持って俺の所まで歩いてきた。そして、先程まで探していた紙と、万年筆を俺に手渡した。
「これ、お前の契約書な。ここに名前書け。」
アーサーは紙の右端を指差した。
（えっと・・名前書ける所は・・・。）
俺は暖炉の前の石の床で名前を書いた。「イタリア・ヴェネチアーノ」と・・・。
アーサーは俺が名前を書き終わるのを見ると契約書を俺の手から取って、しばらく俺の名前を眺めていた。寂しそうだけど嬉しそうな目で。アーサーは俺の名前の上に手をかざした。すると、俺の書いた名前がアーサーの手へと吸い込まれていく。吸い込まれた字と入れ替わるようにして違う文字が手から出てきて紙に張り付いた。

「いいか、これからお前の名は「フェリシアーノ・ヴァルガス」だ。分かったら返事しろ！」
「は、はいぃぃ！！！」
突然言われたものだからびっくりしてしまった。

アーサーは俺を指差しながら自信満々の顔で言った。
「よぉし！！そうと決まればお前は今から俺の部下だ！！分かったな！？」
その後、天井からぶら下がっているロープを2回引いた。誰かを呼んでいるようだ。2分位すると、俺が入って来たのとは違うところから少年が現れた。

―――「お呼びですか？アーサー様。」
俺は自分の目を疑った。なぜかって、そこにルートがいたからだ。まさかここでルートが来るとは思っていなかった。俺は驚きすぎて声を出すことができなかった。アーサーは目を見開いて静止している俺（珍しいよね。開眼してる俺。なんで気づかなかったんだ・・。）を気にも止めず話し出す。
「今日から、コイツがここで働くことになった。アントーニョ達んとこまで連れてけ。あぁ、ローデリヒ達にも紹介しておけよ！」
俺はルートに連れられ部屋を出て、エレベーターに乗った。

―ガチャン。
ドアが閉まり、二人の姿が見えなくなった。
「・・・。また一人集まったな・・・。」
俺は、二人が出ていった扉を見つめていた。すると・・・
「あ～ちゃ～どうちたの？あの人、異世界人なんだよねぇ？ここで

働かせていいの？」
俺のズボンを掴み、俺を見上げながら小さなアルは言った。腕には白クマの人形を抱えている。
（いつの間に一人で歩けるようになったんだ！！？？）
「あるぅぅうう！！！いい子にねんね出来てたなぁ！歩けるようにもなって！！さすがは俺の弟だ！！」
アルに頬ずりをしたら、嫌がられた・・・。うっ・・・（泣）。
「ねぇ、いいの？」
アルはどうしても気になるようで、ズボンを引っ張って俺に聞いてくる。アルに教えるつもりはなかったのだが・・。
（仕方ないな・・・。）
「アイツは異世界人だけどいいんだ。アイツは人じゃなくて国なんだ。だから・・・いいんだ。　これで満足か？アル？」
俺はアルの目線に合わせて座って本当のことを教えた。アルは疑問が解けて嬉しそうな顔をしている。
「うん！！わかったんだぞ！教えてくれてありがとう！あ～ちゃー！！」

（この顔がかわいいんだよなぁ～この時代のアルは・・・。）

――――――絶対、俺の望む世界を作ってみせる。見てろよ、イギリス・・・。

仕事見つかりました。　ｂｙイタリア（後書き）

今回の話はいつも以上にぐちゃぐちゃですね。わかりにくい所があったら教えてください！頑張って直します！６話以降もよろしくお願いします！

結成。麻屋トリオ。（前書き）

――「名前、大事にじいや。」俺は親分の言ったことを軽く流していた。自分の名前なんて、忘れるわけないから――――　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

結成。麻屋トリオ。

俺たちはエレベーターを3回乗り換え、階段を降りて広場のようなところに出た。するとそこには親分がいて、何やら心配そうな顔をしている。横にはそれをアホらしいといった感じに見ている少年がいた。頭からはくるんと一本、毛が生えている。

「あ・・！おやぶ・・」

俺は親分に近づこうとしたが、ルートに腕を引っ張られてしまった。

「こっちの方が先だ。アイツとはまた後で会えるから心配するな。」

ルートは俺の手を引いたまま、広場のような所の端の、机が置いてある所まで歩いていく。

「ん・・。ああ、ルートヴィッヒ。その方がフェリシアーノさんですね。先程アーサーから連絡が来ました。アントーニョの所で働かせろと。」

机に、父役：ローデリヒと書いてある札が置いてある。その位置に座っているのだからこの人はローデリヒという名なのだろう。その隣にはさっき親分を捕まえていた人が座っている。札には、兄役：バッシュと書かれている。

「ああ。その前に皆に紹介した方がいいだろうか？」

ルートはローデリヒという人に首をかしげて聞いている。

「いえ。別にいいでしょう。どうせアントーニョが部屋で皆さんに教えて回るでしょうし。」

ローデリヒは親分の方を見ながら言った。

「そうだな。おい、アントーニョ！！　こっち来い！！」

ルートは遠くにいる親分に聞こえるような大きな声で親分を呼んだ。すると、さっきまで心配そうな顔をしてオロオロしていた親分は、俺を見つけた瞬間パアッと明るい顔になり、こちらに走ってくる。

「いったちゃ～ん！！」

（え・・？イタちゃん・・？って誰だっけ・・。）

「アントーニョ。コイツはフェリシアーノだ。これから、お前とロヴィーノの班で働くことになる。頼んだぞ。」
ルートはそう親分に伝えた。そう、俺の名前は、「フェリシアーノ」だ・・・。

「ん・・。ああ、わかったわ。任しとき！！」
親分は親指を立ててウインク、俺を送り出してくれた時の王（ワン）さんみたいな感じ（もろかぶっている）でルートに話しかけた。
「ロヴィーノ。コイツは今からお前の子分や！しっかり仕事教えたるんやで！」
親分は隣にいるロヴィーノという少年にそう言った後、ロヴィーノが答える間もなくしゃべりだす。
「ほな！俺、他の奴らにもフェリちゃんの事紹介せんといかんから。また明日な！！」
親分は、ルートやローデリヒさん、バッシュさんに軽く挨拶をすませ俺とロヴィーノの腕を引き、そそくさと広場を立ち去った。

「ふぅ・・・。フェリシアーノ！！あかんやないか！！俺との約束やぶってしもたら！！」
灯りが付いていない月明かりのみに照らされているうす暗い部屋で、親分がいきなり俺にお説教を始めた。
「やく・・そく・・・？？？」
俺はなんの事だか分からなくて首をかしげた。すると親分は一回溜息を吐きだして。
「名前、大事にせぇって言ったやないか・・・。」
親分は目線を下に向けている。少し怒っているのだろうか。

「あ・・・。」
俺は親分に言われて思い出した。自分の名前が「フェリシアーノ・ヴァルガス」ではないことを。そこまでは思い出せたが、自分の本当の名前が思い出せない。
「自分の名前、覚えてないんか。もうみんな記憶書き換えられてしもてるで。俺も、さっきまで覚えとったんやけど・・・。」
（え・・？）
「お前がよく考えないでコイツの名前大声で言ったからだぞ！ばかやろー！！あん時お前が名前呼ばなかったら、ルートはみんなに忘却魔法かけなかった！！」
ロヴィーノはちぎーといった感じで親分の事をつついている。
「しゃぁないやないか！俺、そこまで考えられるような頭もってないわ！」
それから3分くらい親分とロヴィーノの言い争いは続いた・・・・。

「こうなったら最後の手段や・・。みんなで自分の名前を取り返しに行くで！６つ先の駅らへんに住んどる「フランシス」ってヤツがホンマの事知っとるて聞いたことあるわ！」
親分は言い争うの途中で思いついたらしく、フランシスという人の所へ行こうと言い出した。
「本当か！？このやろー！　で、電車の切符はどこにあるんだ？！」
ロヴィーノは目をキラキラ輝かせて親分に聞いている。
「あ・・。ないわ。」

「「え〝・・・。」」

しばらく、元の世界には帰れなそうです・・・。

結成。麻屋トリオ。（後書き）

なんだか最近、ただでさえボロクソな文法がボロボロクソクソになってますね。こんなになっても読んで下さる方感謝ですよ～！！頑張って完結させたいと思います！（まだ当分続くのかなぁ・・）

黒鷺（前書き）

昨日の夜、寝ないでずっといろんなことを考えた。でも俺は、本当の名前を思い出すことも、元の世界に戻る方法を見つけることもできなかった。そして、この日の朝をきっかけに、時の歯車が回り始める――――。

黒鷲

―がさがさ・・
俺は昨日からずっと起きていたが、まだ朝早いので布団の中でうずまっていた。すると部屋の入り口から誰かが歩いてくる音が聞こえた。その足音は俺の頭の所までやってきそうなもんだから、ちょっと怖くて布団を頭までガバッとかぶった。
「橋の所まで来い。あんまりメシ食ってないんだろ。たまにアーサー手作りのが出るしな・・。うまいメシ食わせてやる。・・・早く来いよ。」
その声の主は化け物でも、妖精さんでもない。ルートだった。
「ルートっ・・?!」
俺はすぐに布団から起き上がったが、そこにルートの姿はない。
（もう行っちゃたのかな・・。足早いな、ルート・・・。）

俺は、王（ワン）さんとヨンスが薬を作っている部屋（まだ寝ていたが）を抜け、階段を上がり、くぐり戸をくぐって橋の手前に出た。そこにルートの姿はない。橋の向こう側にいるのだろうか・・。
（行ってみようっと・・。）
橋を渡りきると、横にはルートがいた。
（いつの間に・・!!ルートってニンジャなのか・・!?↑冗談です。）
「こっちに来い。」
ルートはそう言って俺をトウモロコシが植えられている畑の後ろに連れていった。
「ここなら、人目には付かないだろう。トウモロコシの葉で隠れてるからな・・。」

そう言いながら辺りに人がいないのを確かめ、懐からタケノコの皮に包まれたおにぎりを取り出し、食え。といって俺に差し出した。俺は差し出されたおにぎりを手にとってすぐに食べ始める。おにぎりを食べていると抑え込んでいた感情が湧いてきて、思わず泣いてしまった。

「泣くな。きっと戻れるから。」
ルートは俺がおにぎりを食べ終えたのを見るともう一つおにぎりを差し出しながらそう言った。
「ルートも名前を、忘れてしまったの？」
俺は泣きながらルートに尋ねた。
「ああ、そうだな。だけど俺は・・・まだ帰るわけにはいかないから、いいんだ。」
ルートは、空を見上げながらそう言った。そんなルートの姿を見ていたら、いつも間にか涙も収まっていた。

「一人で戻れるな？」
ルートは俺を橋まで連れて行ってくれた。
「うん。ルート、ありがとう。俺、頑張るね・・！！」

橋を渡りきり空を見ると、黒く大きな鷲(わし)が飛んでいるのが見えた――――。

黒鷺（後書き）

読んで下さった方々、本当にありがとうございます。次話では不憫さんが出てくるようです。不憫ファンの方々は楽しみにしていてくださいね！

クニナシ（前書き）

橋の所で会った鷲、それは、ルートなのだろうか――――？　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

クニナシ

「うわぁ・・。おっきいなぁ・・・。」
俺は上空を舞う大きな黒鷲を見て、そう言いながら湯屋へと向かった。しかし俺は、とある声に呼びとめられた。
『おい。そこのヘタレっぽいヤツ。』
聞いたことがあるような・・・ないような・・・。あやふやした声だ。俺は誰だろうと思って後ろを向いた。そこには、半透明の人間がいた・・・。
「幽霊!?ぎぃぁぁぁぁ!!!!なんでもするから!なんでもするから殺さないでぇぇぇ!!!!」
俺は無我夢中で叫んだ。
（まだ元の世界に戻っていないってのに、死にたくないよぉぉぉ!!!!）

『ああ!!もう!何もしねぇよ!なんでもするんだよな?お前。』
半透明の人は俺にそう聞いてきた。
「うん!なんでもするよぉ〜!!お願いだから殺さないでぇぇぇ!!!!」
答えはもちろんイエスである。
『なら・・・。1つ頼んでもいいか?俺はもう、存在すべき国じゃなくなったから、もう、帰れないが・・・　ルートヴッヒはもう、帰らないと駄目だ。頼むから、あいつを連れて帰ってくれないか?』
半透明の人はそれだけ言い残し、ささささーと消えてしまった。
（なんだったんだろう・・。さっきの・・・。ルートを元の世界に戻してって言ってたけど・・。ルートも俺の世界から来たのかな・・?だからルート、俺の事知ってたのかも・・・。まあ、いいや。早く親分たちの所に行かなくちゃ・・!!）
俺は急いで親分たちの所へ向かった――。

「もう！どこ行ってたんや?！俺とロヴィーノ、めっちゃ心配してたんやで！」
親分はロヴィーノと一緒に説教を始めた。まあ、この一言で説教は終わったのだけれど。

その後俺はいたって普通な一日を過ごした――。

――『おい・・！！お願いだから、ルートを・・！ルートを連れて帰ってくれ・・・！！』
俺は真っ暗な場所に立っていて、声だけがその場に響いていた。
（この声・・昨日橋の所で会った・・・――。）

「――フェ・・ゃん！！フェリ・・ゃん！！フェリちゃん！」
―がばっ！
「ゆ・・夢かぁ・・。」
俺は親分の声で夢から覚めた。今のは・・夢、だったのか。
「どうしたんだ?フェリシアーノ?」
ぼーっとしている俺を見て、ロヴィーノが肩をゆすってくる。
「夢・・って、何があったんや?怖い夢でも見たんか・・?」
親分は心配そうな顔をしている。ルートを連れて帰ってくれと、橋でも言われ、夢でも言われ・・・。もしかしたら、聞き流してはいけないのかもしれない・・。かといって一人でどうにかできるわけではない。そうだ、親分たちに相談しよう。そうすれば、きっとルートも、俺も、みんなも、元の世界に戻れる・・・。
「あ、あの・・！」
俺は親分達に昨日会った橋での出来事、今朝の夢、全部を話そうと

した。でも、その言葉は言い切ることができなかった。俺たち三人がローデリヒさんに呼ばれたからだ。
「あ・・・。」
「そんな所で寝ぼけてないで、さっさと仕事に取り掛かりなさい！全く！このお馬鹿さんが！」
ローデリヒさんは頭に付いているマリアツェルをピコピコさせて怒っている。
「タイミング悪いぞ、このやろー・・。」
「しゃぁないなぁ・・。　フェリちゃん、すまんなぁ。その話、夜の自由時間に聞かせてもらえっか？」
二人はそう言って、まだ起きたばかりで用意のできていない俺を置いて仕事に向かった。
（早く準備して仕事に行かなきゃ・・！！）
俺は急いで支度を済ませた。ふすまを開けて廊下に出ようとすると、後ろの方から紙のこすれる音近づいてくる。
「なんだろ・・？」
俺は音の正体を確かめようと、ガラス張りの扉をガラッと開け、外の手すりに寄りかかって外を見た。するとそこには黒鷲と、その黒鷲を追っている紙のような鳥が飛んでいるのが見えた。黒鷲の方は何やらぐったりとしていて、フラフラしながら飛んでいた。
「橋の所で見た鷲だ――――！！」
俺はその黒鷲を見てルートだと思った。なぜそう思ったのか分からない。でも、直感的に感じたんだ。あれは、ルートだって――――。

クニナシ（後書き）

やっと不憫君が出てきましたね。動画のコメによると、カオナシは孤独の神様らしいです。ピッタリですね。今回も読んでくださってありがとうございます！次話もよろしくお願いします！

仲間。（前書き）

俺はもう、一人じゃない。それは今だけじゃなくて・・・。これから先も、一人でなんでも解決しようとしてた今までだって、「ひとりぼっち」なんかじゃなかったんだ――――。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

仲間。

「ルートっ！しっかり！こっち！！！」
俺は黒鷲に向かって叫んだ。すると黒鷲はさっきまでと同じようにフラフラしながら、こっちに向かって飛んでくる。俺はルートが部屋に逃げ込めることができるようにガラス張りの扉を思いっきり開けた。
―ガガガガガガ・・！！
俺がドアを開けたのと同時にルートが入って来た。ルートを紙のような鳥の一部はガラス張りの扉に張り付いた。
（この鳥みたいなの・・、ただの紙だ・・！！さっき飛んでたのに・・・！！！）

―クォ～・・クォ～・・
部屋の中でルートが鳴いているのが聞こえる。何やらとても弱々しい声だ。
「ルート！！」
俺は急いでルートの元へ向かい、大丈夫？と声をかけたが、ルートは外を見つめたと思うと、すぐにバサバサッと外へ飛び立ち、麻屋の上の方を目指し飛んでいってしまった。麻屋最上階にはアーサーの部屋がある。
「アーサーのとこへ行くんだ・・！！」
（どうしよう・・。あんなに弱ってるのに・・！ルートが死んじゃう！！）
俺は走って部屋を出て、アーサーの部屋へと向かった。階段を上ろうとしたところで、階段を上がって来た親分たちに呼びとめられた。俺を呼びに来たのだろう。
「フェリちゃん、どしたんや？！そんなにあわてて・・・。それに

泣いとるやないか！」
親分とロヴィーノは心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。
「ルートが死にそうなんだよ・・！！今、アーサーの部屋に向かって行っちゃって・・・！すごい弱ってたのに・・！！！」
俺は泣きながら、それだけ言ってその場に座り込んでしまった。

「そうか・・。なら、ルートを助けに行かな！こんなとこで泣いとったらあかん！」
たったあれだけの言葉ですべての事が分かるわけがない。それなのに、親分はいつもとは違うキッとした目つきで俺を見つめ、しっかりとした口調で俺の腕を掴みながらそう言った。ロヴィーノも、言葉を俺に伝える事はしていなかったけど、しっかり俺を見つめていたから親分と同じような気持ちなんだろう。

――俺は、あの時どれだけ二人に救われただろう。

「おや、ぶん・・・　ろ、う〝ぃーの・・！！」
俺はもう涙が止まらなくなって。二人の腕の中に飛び込んだ。
「わぁっとる。全部一人で解決しなくたってええんや。みんなで、元の世界に戻ろぅな・・・。」
親分はやさしい声で俺を励ましてくれた。
「う・・ん、うん・・！！」
俺は、凄く嬉しくて、また泣いてしまった。だけど、今度の涙はさっきのつらい涙とは違って、嬉しさから出た涙だった。

「ほな、フェリちゃんの涙が収まったとこで。アーサーの部屋行こか。急がなあかんのやろ？」
親分はいつもの明るい笑顔で、俺に手を差し伸べた。
「そうだぞ！このやろー！！もう結構時間たってるぞ！」

――そうだ。俺は、一人じゃないんだ。俺には一緒に元の世界に戻る仲間が、一緒に元の世界に戻る方法を探してくれる仲間がいるんだ――――。

「うん。行こう。この世界からルートを、みんなを助けだすために・・・・。」

―それからの俺の心には、「迷う」なんて言葉も、「一人で解決する」なんて言葉も存在しなかった――。

仲間。（後書き）

どうでしたか？一人じゃないのはイタリア君だけじゃありません。今この文を読んでいる貴方も、あなたの周りにいる、ひとりぼっちに見える人も、です。どんな人の周りにも、その人を良く見てくれている方がいるはずです。いないと思っている方は気づいていないだけだと私は思います。

そんな事が伝わればいいなあ、と思い書いてみました！１０話まで読んでくださって本当にありがとうございました！

子供部屋（前書き）

俺は親分とロヴィーノ、二人の仲間と共にルートを助けにアーサーの部屋へと向かった。アーサーの部屋にたどり着く前に着いたのはやけに散らかった子供部屋で――――。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

子供部屋

アーサーの部屋に行くにはエレベータを使うしかない。が、エレベータはいつもバッシュさんがエレベーターボーイをしているのだ。アーサーの部屋に行きたいですなんて言ったら、いきなり発砲されるに決まっている。

「どないしょ・・・。」
親分は頭を押さえてアーサーの部屋に行く方法を考えていた。その横には、窓の外をボケーッと見ているロマーのがいる。目の前で手を振っても全く反応がない。
「ロヴィーノ??」
俺はロヴィーノの肩をポンポン叩きながらロヴィーノに呼びかける。ロヴィーノはいきなり目を見開くと、俺たちに一つの案を提案した。
「あのよ・・・。窓から出て屋根の上渡って行けばいいんじゃないか・・?屋根の先に梯子あったから結構上まで行けると思うぞ。」
ロヴィーノは淡々と話した。

「え・・。そうなん?ロヴィーノ。」
今度はロヴィーノではなく親分がポケーッっとしてしまった。あれだけ一生懸命考えていたのにローヴィーノに案を出されてしまったのだから理解できなくもないが。

「こっちだ。」
ロヴィーノは廊下のつきあたりにある、少し小さめの窓から屋根にトンっと飛び降りた。俺と親分はロヴィーノの背中を追ってゆく。しばらく進むとロヴィーノは歩を進めるのをやめた。
「ここから先に行くには塀を歩いて行かなきゃいけないんだ。」
ロヴィーノがそう言った先には平均台くらいの幅の塀がある。落ち

たら死ぬというくらいの高さがあった。
（ヴェ・・ヴェェェェェェ！！！！！！！！！）
いつもなら白旗を振って逃げかえっているところだ。だけど、今はそんなことしない。できない。俺は先に塀を歩いているロヴィーノの背中を追いかけた。

「ハアッ・・ハアッ・・！！渡りきれたよ～！！」
俺はやっとの思いで塀を渡りきった。親分は俺とロヴィーノの後ろを歩いていた上に、塀を渡るのがすごく遅いようでまだ塀を歩いている。
「おやぶ～ん！大丈夫～？」
「ん・・・ああ！だいじょう・・うおっ！」
全然大丈夫に見えない。俺がハラハラして親分を待っていると、ロヴィーノは「先行ってんぞ～」と言ってすぐ後ろにあった梯子を上りはじめた。
「あ・・！！ロヴィーノ！親分の事置いてっちゃっていいの～？」
そう言いながら俺も梯子を登り始めていた。すると、ロヴィーノは梯子を上るのを止めて俺の方をジッと見た。
「お前・・むきむきジャガイモの事助けたいんだろうが。なら早く行かねぇと。」
ロヴィーノはそうとだけ言うと再び梯子を上り始めた。
（むきむきジャガイモって・・ルートの事なのか・・？確かに俺はルートを助けたい・・・。親分ごめん、置いていきます・・。）
俺はロヴィーノに返事をしていなかった。だけどロヴィーノの背中を見ていると言葉なんか使わなくても俺の気持ちが通じているような気がした。俺はロヴィーノと一緒にそのまま梯子を上っていく。ルートを助けたい。その気持ちだけが俺の頭の中を埋め尽くしていた。

「お～い！もうすぐ梯子無くなるぞ～！」

かなり梯子を上ったところでロヴィーノはそう告げた。俺もかなり疲れていたけど、親分の方が疲れているだろう。親分は俺たちが置いていった後、ありえない速さで俺たちを追いかけてきたのだ。今は後ろでゼェヒューゼェヒュー言っている。

「窓・・だな・・・」
梯子を上りきるとそこには大きなステンドガラスの窓があった。
「この窓・・開くんだろうな・・このやろー・・・。」
そう言ってからロヴィーノはそろそろと窓を押した。

―ぎぎぎぎ・・・
（お！！開いた！！）
そこはまだアーサーの部屋ではなかった。バスルームのようだ。俺たちは誰かに見つからないようにそろりそろりと歩を進めていく。バスルームを出て左へ曲がり、そのまま歩いて行くと、俺たちは子供部屋のような所に着いた。
「なんや。アーサーの部屋とちゃうやんけ。」
「やけにおもちゃが散らばってるぞ・・・。　あ・・これ・・・・・！！」
俺たちは机の上にスコーンを見つけてしまった。なんだか良くないことが起こる気がしてきた。
（運気下がったよね。絶対。）
部屋をうろちょろしていたその時、
「ああ？そんなの適当に処理しとけ！ばかぁ！！」
何やら電話をしているアーサーの声が聞こえる。かなり怒っているようだ。会話を終えるとチャリンという受話器を切る音が聞こえた。
「ったく・・なんでこうもうまくいかねぇんだ・・・。」
アーサーの声がだんだん近づいてくるのが分かる。

（（（（――――やっべぇ・・・・！！！！））））

子供部屋（後書き）

今回はあんまり話が進みませんでしたね。きっと次の話では話が進むんです！え、親分の扱いが酷いって？気にしちゃダメですよ！１１話まで読んでくださってありがとうございます！

メタ坊、現る。（前書き）

「アイスくれたら道案内してあげる――――。」俺は、小さな取引をした。ルートを、俺の仲間を助けだすために――――。　絶対、死んじゃ駄目だよ、ルート・・・！！！　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

メタ坊、現る。

“ちょ・・！アーサー来おったで！はよ隠れな！！”
アーサーに聞こえないような小さな声で話しながら俺たちは慌てふためいた。アーサーがこっちに来るなんて思ってもいなかったから。
“おい！このクッションの山ん中入ってればばれねぇんじゃねぇか？”
ロヴィーノが指をさした先にはクッションの山がある。俺たち三人は急いでクッションの中に入った。

「ある～？お～い、ある～？」
アーサーはやって来てすぐに人の名前を呼びだした。誰かを探しているようだ。
俺たちはクッションの山の中でアーサーがこっちに来ないことを祈った。が、その願いは神様の所まで届かなかったようで。
「ん・・。もしかしてまたクッションの山ん中で寝てんのか・・？育て方間違ったかな・・・。」
そう言いながらアーサーは俺たちがいるクッションの山の前までやって来てクッションの山を崩し始めた。
（（（うわぁぁぁぁぁあ！！！！やめてぇぇぇぇ！！！！））））
そう思ったのと同時にアーサーはクッションの山を崩すのを止めた。こっちの願いは神様に届いたのだろうか。

「あるぅ～！またこんな所でねんねしてたのかぁ～？まったくもぉ～、きちんとベッドで寝ろっていっただろ～？」
（（（（え゛・・・・・。え゛え゛～？！））））
俺たちは自分の耳を疑った。アーサーが聞いたことのないような高い声を出して話している。あのアーサーが。
（アーサーさん、最初のイメージからどんどん離れていく・・！！

！）
俺は最初のアーサー想像イメージがどんどん壊れていくのを感じた。
それは二人も同じだったようで、目を白目にして固まっていた。

「ん～じゃあ、良い子でねんねしてるんだぞ～アル♪」
少しするとアーサーは子供部屋をでた。そしてもといた部屋に戻って誰かに「そいつの事治療しとけよ。俺はホウキに乗ってちょっと見回りに行ってくるから。」と言っている声が聞こえた。

「もうええんやないか・・？」
親分の言葉で俺たち三人はクッションの山から出ようとした。が、
―がしっ・・！！
「ひょえ・・？」
三人の中で俺だけがクッションの山の中にいる誰かに腕を引っ張られた。さっきアーサーが話していた「アル」という人だろうか。

「お前、俺にアーサーのスコーン食べさせに来たんだな。あれ食うとメタボになるんだぞ。」
そう言いながら小さな男の子は右手にハンバーガー、左手にシェイクを持ち、それを交互に食べている。
「君、メタボなの？ってか、こんな所に引きこもってた方がメタボになるよ！運動不足で。」
俺はこの子の将来の健康が気になったので食のアドバイスをした。
「運動したくないからここにいるんだぞ☆」
・・・・・。この子は反抗期なのか・・？まあ、いいや。コイツがメタボになって死のうが関係ないしね。メタボになって死ぬのかどうかは分からないけど。そんなことはどうでもいい。俺は、ルートを助けに来たのだから。
「あのさ、俺の大事な仲間が大変な目にあってるの。だから、今すぐ行かなきゃいけないの！お願い、手を放して・・？」

俺は反抗期の子供にそう言った。一刻も早くルートの元へ向かわなければならないのだ。
「ええ～・・・。じゃあ、アイスおごってくれる？なら、君の仲間に会わせてあげる。ルートヴィッヒって人なんでしょ？」
反抗期少年は俺に取引を持ちかけてきた。アイスくらいなら・・・。
「うん！わかったよ～！俺特製のアイス作ってあげる！」
そう言うと反抗期の子供はいきなり目を輝かせて。素直な少年の瞳を取り戻した。
（うわあ・・。この子扱いやすいよぉ・・・。ヴェ・・・。）
「こっちなんだぞ！」
少年はクッションの山をバゴンと跳ね飛ばし、タタタタタ・・・・と走って道案内を始めた。

「あ・・。おい、フェリシアーノ！お前どこに・・」
「また後で話すよ～とにかく今は俺についてきて！なんか案内してくれるみたいだから！！」
俺は走りながらロヴィーノに返答した。

―待っててね・・ルート・・！！絶対、死んじゃ駄目だよ・・！！

俺は強くそう願いながら少年の後を追った―――。

メタ坊、現る。（後書き）

なかなか話が進みませんね・・・。本当にすみません・・・。まあ、そのうち終わりますから。読んでくださっている方は頑張って読み切ってください！感想、評価の方大歓迎です！（優しいアドバイスなども下さるとうれしいです！）今回も読んでくださってありがとうございました！！

希望のヒカリ（前書き）

ルートは闇の中を進んでいく。俺は声を出さずに、いや・・・。出せずにルートの背中に乗っていた。　ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

希望のヒカリ

「こっちなんだぞ！」
アルは俺が初めてここに来た時に契約書に名前を書いた場所に立ち、石の床を指差した。そこにはルートがいた。血まみれになったルートが。

「！！！！ルートっ・・！！！！」
俺は勢いよくルートの元へ駆け寄った。ルートは黒鷲の姿をしたまま倒れていた。意識はないようでぐったりしている。後ろから、あいつルートヴィッヒなんか・・？　さあな、アイツがそう言ってんだからそうなんじゃねぇの？という親分とロヴィーノの会話が聞こえてきたが、今はその会話に入るべきときじゃない。ルートの事が最優先だ。
「ルート・・！！ねぇ、ルート！目を開けて・・・！！」
俺は泣きながらルートを抱きしめ、ルートの名前を呼んだ。何度も、何度も・・・。しかしルートは目を開けてくれない。
「死んでないよねぇ・・！！るーとぉ・・！！！」

「そいつはまだ生きてる。心配しなくていいんだぞ。あぁ、今からそいつをこの穴の中に落とす。妖精さんたちがそう言ってる。」
アルはルートを指差しながら言った。俺は周囲を見回し妖精さんとやらを探した。が、そんなものはどこにも見つからない。
「お前にも見えないんだな。きっと心がフジュン？なんだよ。アーサーが、妖精さんが見えない奴はみんなそうなんだって言ってた。」
アルはそう言いながら天井の方を見上げている。
「待って！！！どうして妖精さんたちはルートを落とそうとしてるの・・！？ルートは何もわるいことしてない・・！！！」
俺はルートをギュっとさっきより力強く抱きしめた。ルートが穴の

中に落とされないように。穴の中は暗く、そこが見えない。それほど高い所から落とされたらルートは死んでしまうだろう。
（絶対ダメ・・！！！ルートはみんなと元の世界に戻るんだ・・！！）
そう思っている間に、ルートが何者かに押されているのを感じた。
妖精さんなのだろうか。
「ダメ！！放して・・！！」
俺はどこにいるか分からない妖精さんに声をかけた。その声は妖精さんには届かず、俺はルートと一緒に穴の中に落ちた――――。

「フェリちゃん――！！！」
「フェリシアーノ・・――！！！」
二人の声が俺を呼んでいる。俺は穴から見える少しの風景とともに自分の意識が遠のいていくのを感じた――――。

―ヒュ～・・・
気がつくと、俺はルートの背中に乗っていた。ルートは黒鷲の姿で暗い道を抜けていく。俺は何も言葉にせず、ただただルートにしがみついていた。ルートは凄い速さで暗闇を翼で切っていく。

――しばらくすると目の前に小さな光が見えた。それは、俺たちが元の世界に帰るための希望の光だったんだ――――。

希望のヒカリ（後書き）

今回は短いですね～・・・。切る所が見つからなかったんです。スミマセン・・・。まあ、今回も読んで下さったそこの貴方！本当にありがとうございます！次話もよろしくおねがいします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0754z/

フェリとイタリの神隠し

2011年12月16日21時52分発行